

自分の強みを生かせ

先日、小学校英語早期化・教科化、中学校英語高度化に関わり、先生方と話す機会があったので、そこで感じたことを書きます。

課題山積で、どのような研修を行うか、どんな大学の先生に指導を求めるか、時間どのように捻出するか、など、実践するための切実な話題が多かった。

そんな中、ある小学校の先生は、こんな意見を述べた。

「小学校の英語と中学校の英語の関わりを十分に研究する必要がある。小学校で英語が好きになったが、中学校の文法等に十分ついて行くことができず、嫌いになることを防ぎたい。」と。

しかし、それに関連した意見は続かなかった。

私は、その意見を聞いたとき、「これだ!」と感じた。

皆さんおわかりのとおり、小学校の英語教科化は、中学校英語の先取りでは決していない。

英語活動の「聞く」「話す」に加え、児童の英語に関する興味が自然な形で「読む」「書く」へ広がっていった背景を大切にすることが目的のひとつである。

「使えた」「通じた」「楽しい」「わかった」「もっと勉強したい」が大切なのである。

そのような児童が、英語を学びたい意欲を持って中学校へ入学したときに、彼ら彼女らをいかにスムーズに受け止め、伸ばしてあげることができるかが重要である。

つまり、小学校英語早期化・教科化は、中学校英語の革新が必要なのかもしれない。

会合が終わって、その先生に声をかけたら、かつて中学校で英語を教えていたらしい。

小学校・中学校の指導経験があるからこそ実感した意見だったのだろう。

その先生の強みは、まさに経験である。これを積極的に生かしてほしいものである。

このような事例は、従来から「理科」でもあった。(あり続けている)

いろいろな体験を持ち、理科が楽しいと感じて中学校に入学したら、単位、計算、抽象的な内容など、いっぺんに理科嫌いが生じたことは多々ある。このようなことが起こらないように、小学校教諭と中学校教諭は連携する必要がある。有効な実践研究を行い、成果を発信してほしい。

小学校英語に関してひとつ追加。

小学校英語の書籍やコンテンツを見て感じたことがある。

文は簡単だが、単語が難しい。

難しいというより、身近な生き物や物に関した単語が多く出てくるため、読んでいて、「何だったかな」と思う単語が出てくる。

しかし、当然だろう。児童は、身近なものに興味があり、その単語を知りたがり、教材にも出てくるだろう。したがって、小・中の先生方は、身近な生き物や物の単語にふれる必要があるだろう。

先生が中学校や高校で学ばなかった単語が出てくるかもしれない。

タンポポ、メダカ、カブトムシ、・・・ どんない単語かな？

ちょっとちがった発想で英語の復習が必要かもしれない、と感じている。

発想豊かで、私のような年寄りとちがった感覚を持っている若い先生方は、いい授業を行うのではなかろうか。

若い先生が多いこの時期を狙って国（文部科学省）が英語教育の早期化を導入したのであれば、素晴らしい戦略・政策である。